
聖なる夜のへたれサンタ

津凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖なる夜のへたれサンタ

【著者名】

津風

【あらすじ】

新米サンタは落ちこぼれ。腕の良いトナカイと組むことになったのだけれど、「先輩と呼べ!」と、言つトナカイに、サンタはすっかり怯えてしまう。

空を駆けるためには訓練が必要だ。トナカイだって、空を走れるようになるまで厳しい訓練を受けなければならない。

人間の場合は、まずそりを宙に浮かせることから始まる。次に、そりに乗った状態で浮かせる訓練。それから、トナカイと息を合わせて走る訓練だ。

「え？ 僕が、ですか？」

聖夜の一時間前、唐突に出された指令に僕は目を丸くした。

「欠員が出たんだ。他にくらべると狭い地域だから、お前でも出来るはずだ」

上司サンタにそう言われて、僕は戸惑つ。

「そんな、急すぎますって！ だいたい、僕はまだトナカイとの合同訓練も一回しか

「心配するな。今回は緊急事態ということで、最も腕の良いトナカイと組んでもらう。相手に任せておけ」

「ほんと肩を叩かれて、何ともやるせない気持ちになる。

「ええ、そんな……」

僕は今年、新しく入ったばかりの新米サンタだった。来る冬のためにがんばって訓練を重ねてきたものの、僕は同期の中でも落ちこぼれ。そりに乗った状態で浮かせることが出来たのもつい一週間前だった。

トナカイとの合同訓練にいたっては、まだ一回しかできておりず、一メートルも上手く走れない。

同期の連中はみんな、今年から仕事を『えらんでいた。僕だけが来年を待って訓練に励む予定だったのだけれど……ああ、まさかこんなことになるなんて。

不安で胸をいっぱいにしながら、サンタクロースの制服に着替えて指示された乗り場へ向かう。

アルバイトの人たちがそりの後部座席にプレゼントの入った袋を詰めている。前方ではトナカイがロープを調整していた。

歩み寄りながら、僕はちょっと大きめの声を出す。

「おはようございます」

一斉に向けられた視線に、一瞬びくつとした。

「あ、おはようございます。もつすぐ終わるんで、待つてて下さー」と、アルバイトの人が言つて、僕は頷く。

とりあえずそりの乗り心地を確かめようと思つたら、トナカイが僕へ言つた。

「お前、やけに自信なさそうだな」

「え？ あ、いや、別に、そんなことないですよ」

慌てて言葉を返せば、トナカイが鼻で笑う。

「ふん、見榮張つたつて無駄だ。俺様には分かるんだよ」と、前を向く。

「う……」

何だかすごく怖いんだけど、このトナカイが僕のパートナーで合つてるのかな。

不安が増していくのを無視し、僕はそりに乗り込んだ。軽く手綱を手に取ると、トナカイがまた言つた。

「あんまり引っ張りすぎると」

「わ、分かつてますよ」

やつぱり怖い。心なしか、トナカイの目つきがマフィアか殺し屋のようにも思える。

「よし、準備終わりました

と、アルバイトの人が言つた。

「ありがとうございます」

僕はそう返し、空を見上げた。夜がだんだんと更けてくるのを確認し、手綱をしっかりと握り直す。

「それじゃあ、行つてきます」

「はい、お気を付けて」

そりに神経を集中させて、ふわっと浮き上がる。

トナカイが前足を踏み出すと、そりが前方に少し動いた。初めての感覚に胸を高鳴らせる僕だったが、すぐにトナカイによつて落ち込んでしまう。

「下手だな。俺様が引っ張つてやるから、バランスだけ保つて」と、急に速度を上げて駆け始めたからだ。

「ええ、ちょっと待つてよ、トナカイさん！」

「先輩と呼べ！」

何故か叱られて、僕は言い直す。

「つ、トナカイ先輩、速すぎますつて！ もうちょっとゆっくり

空を駆けるのは気持ちが良かつたけれど、星空を楽しむ余裕が全くない。

「何だ、怖いのか？ でも見ろよ、他の奴らはもつと速いんだぜ」と、トナカイ先輩に言われて首を回すと、確かにいくつものそりが僕らよりも速いスピードで遠ざかって行くのが見えた。

「もともたしてると、間に合わなくなるからな

と、トナカイ先輩。さすがに経験を積んだトナカイは違う。

僕は必死にそりのバランスだけを保ちながら、これからのことを見つた。

指定された地域の子どもたちに、プレゼントを送り届ける。朝になる前に無事仕事を終えれば、僕も立派なサンタクロースだ。

「高度下げるぜ

「はい……え？」

ぐんっと下方に引っ張られて、保っていたバランスが崩れた。

「あ、あわわ、ちょ、ま、あわわわっ」

左右にぐらぐらしたものの、どうにかバランスを取り戻し、そりを地面と水平にすることに成功する。

「バランス保てって言つただろ！」

「あう、ごめんなさいっ

風の合間に怒声が響き、僕は思わず顔をしかめた。

「俺様は力があるから良いけどよ、本来はそりがしつかり浮いてないと走れないんだぜ。それがバランス崩したら、そりの重さでトナカイごと落下だ」

それ、訓練の初めに習いました。

「俺様は力持ちで忍耐強いから平気だけどなー。」

と、トナカイ先輩。どういう意味なのか突っ込みたかったけれど、僕は耐えた。

バランスをしつかり保ち、トナカイ先輩の進む足に合わせてリズムを取る。浮遊するのも大事だけれど、それは先輩の怪力でどうにかなっているようだ。

「さあ、見えてきたぜ。まずはどの家に行くんだ？」

「えーっと、ちょっと待つて」

片手を上着のポケットに入れ、配達の順番が書かれたメモを探る。

「……えーっと」

無い。もう片方のポケットも探してみたが、無い。

「ん、どうした？」

トナカイ先輩がちらつと僕を振り返り、僕は慌てた。

「あ、いえ、えっと、確かここに……あつれ、おかしいなあ」

嫌な汗が噴き出してくる。トナカイ先輩の視線が険しくなり、僕は覚悟を決めた。

「メモ、忘れてきちゃいました」

「馬鹿野郎！ それじゃあ仕事にならねえだろ？ がーー！」

「うひやあ、ごめんなさいーー！」

トナカイ先輩ががうがう吠える。僕はそれを右から左へ聞き流し、重い溜め息をついた。

やつぱり僕、立派なサンタクロースにはなれそうもありません……。

トナカイ先輩の助けでどうにかこなしたが、配達は無事に終了した。

ただ、地面に何回か落ちてしまったので誰かに見られた可能性はない。

すっかり落ち込んでいた僕は、そりが乗り場に到着したところです
また溜め息をついた。

「今日は本当にごめんなさい」と、そりから降りる。

「ありがとうございました、トナカイ先輩」
ペコッと頭を下げ、僕は上司の元へ戻ろうと歩き出す。すると、
トナカイ先輩が言った。

「おい、そこの新人サンタ！」

立ち止まって振り返る。先輩は相変わらず怖い顔をしていたけれど、笑った。

「今夜は久しぶりに楽しかったぜ。ありがとうございました！」
胸がぎゅっとなつて、僕も笑った。

「はい！ また来年、会いましょうね！」

けれども、トナカイ先輩は返事をしなかつた。ロープから解放されたトナカイ先輩は、僕を振り向くことなく反対方向へと歩いて行ってしまう。

来年こそ、立派なサンタクロースとして仕事を出来るようにがんばろう。子どもたちの笑顔のために、聖なる夜の特別な日のために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6885p/>

聖なる夜のへたれサンタ

2010年12月24日13時41分発行